お茶の水女子大学附属幼稚園

「実際指導研究会協議会」より

一、製作を一斉にしないことについて

A　子どもによって製作にかかる時間のずれを感じたのですが、どのような指導をなさっているのですか。

村石　製作にかかる時間の個人差のことですか。確かに個人差があります。製作の用意をしますと、すぐにのってくる子もいますし、あとの方で友だちのつくったものを見て刺激を受けて、つくりだす子どももいます。

A　できてしまった子は、次の段階へいきたくて待っていると思います。今つくっている子、まだつくっていない子、もうできてしまっている子、それぞれをどのようにあわせて指導していらっしゃるのですか。

村石　それは、人形芝居の人形づくりのところでみられました。早くつくりはじめた子は、次の段階の人形芝居の方にとりかかりたいので「先生ピアノひいて」とさかんにたのみにきます。片方の子は「どうやるの」「ここととめてちょうだい」「紙ちょうだい」といってきますので、なかなかピアノの方にはいかれませんでした。

子どもによっては非常にゆっくりと時間を費してやる子と、すぐ次のあそびをやりたいという子がいます。早くつくりあげて次のあそびを早くやりたい子には、その子たちの気持になって「あとでね」とはいわないで、次のあそびへのきっかけをつくってあげ、なるべく早くあそびの加せいにでかけてあげたい。子ども自身の考えを生かしながら製作している子もいるので、製作には、十分時間にゆとりを持たせています。

関　五歳の根本は、四歳と変わりがありませんが、グループ指導の型をとっています。

進行状態の早い子、思いつきのよい子、細かいことまですすんでよくやる子、それぞれの子どもの好きなように出来ますし、製作が得意でない子、技術的につたない子、思いつきの悪い子も、個々に目がとどきやすいと思います。三十人〜四十人の子どもが一度に「ここどうするの」「ここどうするの」というような経験は、しないわけです。

確かにこういうやり方をしていますと、

長い時間かかる子どもと、そうでない子どもの個人差が大きいと思います。

幼児期には、子どもの持っていないものを無理に一つの水準までひっぱるというのではなく、その子どものもっている状態をみて、それに従って、それぞれの個人差をふまえて、伸ばしてあげればいいのではないでしょうか。

だから、ある子どもには、要求が高くなるでしょうし、ある子どもには要求が低くなるでしょう。その子どもに合わせて、個人指導の気持でやっております。

坂元 早くできた子どもを、まだできてない子どもが、おさえているという点に問題を感じてらっしゃるのでしょう。ここのやり方は、そういう場合、外で平気であそばせています。何でも仕事をする時は歩調をそろえなければいけないという考え方が前提に立っての問題意識でしょうが、ここの先生方は、やむをえない場合もありますが歩調を合わせて何かしなければならないという考え方は、持たないことにしています。

いつかこれから先やるだろうし、もう今までやったであろうし……、という大きな気持で、今、この活動に参加しているある時間の断面だけを見て、その時どうしてもしなければならないとは考えないのです。

B 製作をするのに、グループ指導をしてらっしゃるのを見せていただきました。

先生は、ちょっと席を立たれると、やりたくなさそうなお子さんや、何をしてよいかわからない子らに、興味を持たせ、メンバーに加えて、またその場所に帰ってらっしゃる。

自主的に楽しんでする子と、先生の話しかけなどで入ってくる子と、なかなかしない子とあると思いますが、そういうとき、先生方は保育の終ったあと、反省ないし、明日の保育への配慮があると思いますが、そのへんのところを聞かせて下さい。

関 「お部屋でこんなことをしてるわよ」とか「〇〇ちゃんたちこんなことして遊んでいるわよ」など知らせる機会をつくったり、材料を目につくところにおいておいたり、保育者がだまってつくっていたりして、知らない子どもへ知らせる努力はします。

無理にやらせて、やれない場合の危険を考えて、一日で終わらなくても、その気持になるまで、時間をかけて待つ保育者の気持が大切だと思います。次の日に材料を目に見えるところにおいておいたり、興味をもってくる状態を見つけてひっぱってあげる場合もあります。

一日すぎましたときは、ふりかえって日誌をつけます。年間を通して子どもの行動、活動の記録をつけていますが、そのことも参考にします。

二、自由に園庭に出ていくことについて

C 子どもたちが、本当に自由にあそんでいるとき、部屋の中、外、先生の目のとどかないところと、ちらばってしまいますね、そういうときの先生の位置は、どのようになさっているのですか。

堀合 外にいれば内が心配、内にいれば外が心配と、今日ごらんになって感じられたのではないでしょうか。

これは、一度にできることではありませ

ん。入園当初よりの教師の考え方、心の持ち方が、今日までつづくのです。

まず、幼稚園、先生、友だち同士に安定感を持つことが必要です。先生と子どもの密接感を持つために入園一週間の先生と子どもの努力は、他の一年、二年にまさるものをしないとそれができないわけです。

先生がお部屋にいて、たとえ子どもがお山にいて姿が見えなくても、細い糸でつながっているような精神的なつながりがあるわけです。それを一日もはやくつけるよう努力するのです。それができないうち先生はあっちこっちはしりまわり、何人先生がいてもたりない位にうごきます。

皆が満足して遊ぶということと、お互いに安定感を持つという努力といりみだれてやっていくわけです。また、生活習慣、基本的習慣なども並行して身についていきますと、友だちをすぐにぶってしまわないとか、けんかしても話し合いができるとか、子ども同士にも安定感が育ってきて、信頼感ができてきます。

大きいグループだけをみわたすというのではいけないのですが、子どもと仕事などやる場合、そちらの方に力が必要になってきますので、その時は、目だけで追うとか、時々「どうしているかな」と見にいったりします。

なにしろ、子どもたちと先生と、目に見えない心の糸をつくることが第一です。

村田　どの子どもが大体どの位置にいるかということは、こういう型で保育をしていますとたえず見当はつけているのですが、今日は二人の子どもを失いかけそうになりました。

遊戯室に行こうとした時、さっきからどうも目に入ってこない子がいるなーと感じてはいたのですが、人数をかぞえてみるという手段をつかわなかったわけです。ピアノに合わせて、歩かせてみますと、どうも何か心にたりないものがあるような気がするのです。そこで、ちょっと目でかぞえてみますと、二人たりないのです。そして「ああ、山にいってたな」と気がつき、呼んできてもらったのです。今日は皆さんおおぜいの方がいらっしゃったという普段とはちがうせいもありますが、二人の子どもを失いかけ、二本の糸をたぐることができたのも、私とその子どもたちとの間に心の糸がつながっていたからだと思います。

経験もありましょうが、やはり、子どもの中に入りきっていれば、なんとなくひっかかってくるという実例として話しました。

坂元　とてもおもしろい実例でしたね。私もそういうことが大好きで、先生方が、その位の度胸を持つ必要があると考えています。

それでもなおかつ、あぶなくないのだ、山に遊んでいても、そのこと自体にも意義があるのだ位の自信と冒険と、冒険に対するがまんというような面もなければならないのです。

子どもも、先生のいないところでは不安で活動できないということでは、こまったことです。先生からはなれても安心して遊べるということの証拠の姿をみせてもらったという気持です。

先生がいなくても、子どもたちだけでも十分できるのだ、という子どもに対する信

頼がなければなりません。見えないところでも信頼して活動させてやるという度胸を持つということは大切なことです。

子どもを一本立ちにして、自分で自分の判断で行動するとか、のびのびした明かるい子にするというためには、どうしてもこのふみ切りが必要です。物的な環境を危険のないように十分ととのえておく必要はもちろんありますが、何がおこるかわからないことにびくびくしてやらせないことは、子どもを小さくしてしまうのではなかろうかと考えます。

三、個人に応じた教育について

D　一年を通じて、今日のような保育の形をとっているのでしょうか。自由保育という点で、子どもたちが、のびのびとあそんでいる。それは、私共、毎日、保育をしていて考えられないことです。

坂元　一年を通じてという意味は、そうしないことがあるか、という意味ですか。

D　たとえば、入園したばかりの子どもたちを、実際に今のように、子どもたちが、のびのびとあそび、友だちやクラスをよく把握していけるようになるには、先生方が一人一人を確認し、どの程度、その子が能力をもっているか、どういう子が毎日どういう遊びをしているか、など、先生のご指導の賜物だと思いますが、そういう意味で、どういうふうに毎日毎日一人一人の子どもを確認なさって、次への保育の指導をしていらっしゃるのか、そういう意味を含めて質問したわけです。

坂元　端的に申しますと、そういうところを今日見ていただきたいと思ってこの研究会をやったわけなのです。今日のようにしてやるのだということが、一番望む大きな答だと思います。しかし、今日、見えないところが前後あります。それは、私の個人の考えを、大げさにいうと、私共は、子どもを入れて、子どもの一人一人を立派に育てることをやっているのです。一人一人とあそんだり、一人一人を立派にしたり、一人一人を元気にしたり、一人一人をのびのびさせたり、ということが、私どもの仕事なので、なにもまとめてやらなくてはいけないということは、方便としか考えていません。一人一人が立派にのびるための一つの場面として、まとめてやるということも、いくつかあり得るわけです。

こういうものの考え方が、基本的にあるということ、そしてそれが、一番大きな基本的な考え方です。従って施設にしても、設備にしても、四十人いれば、四十人しかすわれない椅子で、びしっと身動き出来ないような所にいれる、というふうな「ものの考え方」は、しません。が、万一、そういうような幼稚園なり保育所を、お持ちになった場合には、それは、やはり、考え方としては、一人一人を育てることだけれども、実際には、一しょに同じような仕事をさせる以外にないということになります。しかしその時でも、気持は、一人一人を育てるという基本的「ものの見方」というものが、必要だということを、私は個人的に考えております。

ここの先生方のやることは、例えば、三歳なり、四歳なりの子どもが入ってきた時に、何人か、または相当多くの人数が、先

生ともあそべないでおります。しかし、まず、先生とあそべるようにするとか、隅っこで遊べるようにするとかします。私どもの幼稚園には、いろんなガラクタがいっぱいあります。あれをみて、ある心理学者は、「これは、はじめの子どもたちを安定させるには、最大の施設だ」とこういいました。先生方は、こういうことに気づいていたわけではないのですけれども……。というのは、ちょっと隅に入って、ちょっとあそべる。その隅から、チョコチョコとでてこられるようになって、杓文字で砂をたたいている。すると先生が、横でたたく。すると一しょにたたくようになる。そういうことから、だんだん先生とあそべたり、友だちと並行してあそんだりすることが出来るようになる。こういうことを先生方は自分を投げだして最初のうちは、なさるわけです。今日あたりも、まだその段階なのです。ですからまだ、先生が、一しょになって泥まみれになってやっていらっしゃるというのは、結局そういうことなのです。

三歳児の例をとれば、あれは、十五人まとまってやっているのか、一人一人が偶然、先生と一しょに十人位集まってやっているのか、その区別は、ないわけです。それを区別して、これは一しょにやっているんだ、これは一人一人やっているんだという「ものの考え方は」は、全然ないわけなんです。はじめが、そういう形ですから、自然に子どもたちが、先生とあそばなくても、自分たちでもあそべるようになる。

それを先生方が、どんどん助長するわけです。はじめは心配ですから、ついていったり、いろいろなさいますが、しばらくすると、離れて、子どもたちが十分あそべるようになるということを、むしろ歓迎するわけです。むろん心配もしますけれども。だけど、やっぱりそこに思いきりが、なければなりません。子どもたちが外であそんでいても、自分は、わかっているという自信と、子どもに対する信頼というものが、なければならないということです。

しかし、歌を、子どもたちとうたうというような時には、ただ一人や二人で歌っても、子どもたちには、おもしろくありませんから、できるだけたくさん集まってうたうとか、例えば、遊戯室を使う時間というものは、限られていますから、その時には、いろんなことをやめて、一斉にくるようにするとか、そのような活動とか、その場に応じて、みんなで一斉にするということはあります。しかし、それが、本体だとは、考えていません。

このようなことを一年間を通じてやっていますかと言われると、大体この通りにやっておりますが、三歳児や四歳児で入った時と、それが、大きくなって、ずっと後になってからのものは、外側からみると同じですが、内面的には、ずいぶんちがうと思います。

今年は、どういうわけか、五歳児がやるような遊びを四歳児が、室内などでやっています。しかし、よくみてみますと、実際には、ちがいますね。たとえば、三歳児だったら、一人で勝手なことをやっている。四歳児だったら、少しエネルギーが、あるものだから、勝手なことをやりながら、一しょに平気でやって、けんかもしないで

つくっている。ところが、五歳児になりますと、池をつくったりする場合に、なんらかの形で協力していますね。だから外からみると、四歳と五歳が、同じ池をつくっているけれど、実際の活動は、ずいぶんちがうんですね。だから外からみると、同じような活動ですけれども、内面的には、相当ちがうと思います。形としては、一年間こういう形をとっています。

決して、こだわっているのではなく、一斉にやることが必要な場合には、一しょにやります。素直に考えれば、一人一人をあそばせておくのが大切であるということです。

E　ここの園の教育課程は、先生方全員でお考えになり、週案的なものは、先生方各自が、おたてになるのですか。

坂元　週案については、自由に考えるものであるという考え方です。いつ頃からはじめるなどということは考えず、出たとこ勝負でやる。そして、子どもたちは、子どもたちでやらせておいて、先生は、先生で考え、それが、一致しなくても、卒業するまでには、いろいろな経験をすると考えています。

F　保育雑誌など読んでいると、日案が時間的に細かくたっているのがあって、こんなに出来るのかと思いますが、私の園では、田舎なもので、お天気がいいと、「今日は、お散歩に行きましょう」と言って、ぱっと、めだか取りに行ってしまいます。それで明日は、これをやろうかなと思っていることも、それで、ふいになってしまったりするのですが、この園では、どの程度の日案をたてているのか、きかせていただきたいのですが。

坂元　日案というものが、紙にかいたものというなら、日案は、ありません。それは、先生の頭の中にあります。ですから、より弾力的にやれると思います。そういう「ものの考え方」です。ただ、ここの先生方は、なんにもかかないのだと言うと、そうでは、ありません。今日これだけのことをおやりになったら、今日のことは、ちゃんと記録されます。そして、子どものことをかきます。そういう時に、恐らく、明日のことだとか、今日の反省あるいは過去の反省だけでなく明日、または先のことが、閃めいて頭の中に出来上がると思うのです。

適切にその通りやったり、離れてみたりしていろいろなさっていると考えます。しかし、私は、皆さんが日案をおかきになるのを排撃しているのでは、ありません。それには、それとしての善さもあり、意義もあります。しかし、世の中、そればかりがいいと考えない方がいいということのために、ここの習慣を申し上げますけれど、今、皆さんが、共通に研究してみたりなさる場合にその園が、各部屋で別のことをやったのでは、やかましくて出来ないということもあろうかと思います。それぞれいろいろな条件で、日案を紙にかくことも意義があるように、弾力的におつかいになることを期待しますが、この園では、このようにしております。

（これは、六月三日～八日までの一週間、お茶の水女子大学附属幼稚園で行なわれた実際指導研究会協議会の記録の一部です。）

（文責・編集部）